

降誕節後第二主日

「主を喜ぶことがあなたがたの力」

ネハミヤ8：9-12・ペトロ2：4：4-1

7

(1)

今朝は、新年最初の礼拝として、ネハミヤ8章9節以下を読んでいただきました。

実は、8章2節の「第七の月の一日」は、イスラエルの元日にあたります。エジプトにおける奴隷の苦役から救出された記念として「第七の月の一日」を年の初めと定めたようです。

8章9節から12節をもう一度読みます。

「総督であるネハミヤと、祭司であり学者であるエズラと、民に解き明かす人たちは、民全部に向かって言った。『きょうは、あなたがたの神、主のために驅逐された日である。悲しんではならない。泣いてはならない。』」

民が律法のことを聞いたとき、みな泣いていたからである。ネハミヤは彼らに言った。『行って、上等な肉を食へ、甘いびびり酒を飲みなさい。何も用意できなかつた者には何かを贈ってやりなさい。まよひ、私たちの主のために驅逐された日である。悲しいではならない。あなたがたの力を主が喜ばれるからだ。』」

とあるので、8章10節には米印が付いています。そこには「主を喜ぶこと」は、あなたがたの力であるから」とあります。が、これは以前の口語訳聖書の訳です。

共同訳聖書は、「悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたがたの力の源である。」

ちなみに、「このことは社」出版の「新聖書註解」には、「ここは口語訳が理解しやすいと思われる」とあるので、す。

今朝は、口語訳を中心に話を進めます。ネハミヤ記8章10節の「喜ぶ」は、「アドワー」というフル語です。「ヘイスチング」の編纂した「聖書大辞典」には、「アドワー」とは、「主から賜われる喜び」とあります。「喜びの源泉」が神ご自身にあるという意味です。「アドワー」は歴代誌上16章2節とエズラ記6章16節の2カ所にしか出てきませんからきわめて特殊な言葉です。

以前、前橋市の「舟喜隣」先生から喜寿の記念として色紙をいただきました。「主を喜ぶようにならせてください」とありました。字は達筆とはいえませんが、ひらがまと言えば、金釘流かなくきりゅうに近いです。失礼ながら、これなら、筆に調法のわたしでも色紙に書いてもいいかなと思います。しかし、書体や字配の好むの際どいのもいいのです。そこに書かれている御言を見つめながら、ひひひひひひ、主を喜んでいない自分に気づきました。将来に不安をいだきながら神学校最終学年を迎えていた時でした。

最近、ある方から、「詩編の意味が分からない」と尋ねられました。確かに、詩編を読むと、「ただえのうた」はほと

んど見当たりません。大半が「嘆きのうた」です。にもかかわらず、詩編を「ハレルヤ」の語源である「テヒリム」・「たえのうた」とのタイトルを付けたのは、それなりの理由がありました。詩編の大半が、嘆きや悲しみの歌でありながら、神により頼む者は、いかに嘆きや涙の谷を通ろうとも、最後にはたたえの歌となるという確信を抱いていたからです。

詩編一編は、「アシユレー」・「さいわい」で始まり、詩編150編の最後は、「ハレルヤ」で終わります。これは決して偶然ではありません。そこには、神に寄り頼む者の生涯は、「さいわい」で始まり、「ハレルヤ」にいたることを暗示しています。

以前、全アジア地域の伝道会議が開かれたことがあります。その時、それぞれの国の教会の特徴が話題となりました。お隣の韓国の教会は「祈る教会」、インドネシアの教会は「賛美する教会」。ところが、日本の教会は「考える教会」と言われたそうです。「いつた見方が正しいかどうかは分かりません。しかし、もしも、考えてばかりいる教会で、祈りと讚美に乏しい教会とすれば、これは大いに反省を要します。

ところで、教会に対して「いつも主にあって喜びなさい」と勧めた使徒パウロは、その時、パウロはローマの獄中にいました。日夜兵士に囲まれ、いすれ裁判にかけられ、死が身近に迫っていた時でした。それでも「いつも・主にあって」「喜ばなさい」と勧めています。

「モーツアルト」は、あれほど素晴らしい数々の作曲をしましたが、実は、常に身体の弱さとお金の乏しさに生涯苦労をしたといえます。彼ほど生きていることを喜べない境遇にあった人はいません。一日たりとも、不快な思いを抱くことなく、寢床についたことはなかったといえます。それでも、曲はなんと爽やか、軽やかでしょううか。

「ベートベン」に至っては、交響曲・第九番の最後、「フロイデ・フロイデ」の大合唱の音が会場に鳴り響き、「フラボー」・「フラボー」が鳴りやまない時に、彼だけはその声を耳にすることがありませんでした。それでも、内なる「フロイデ」(喜び)を失うことがありませんでした。

「生くるうれし、死ぬるもよし、主にあるわが身のさちは等し」ー、讚美歌361番3番の歌詞(新聖歌なら511番の讚美歌)です。忘れもしません、8年前、ステージ3に近いS字結腸のガンの手術を受けた次の日の朝、病院のベッドの上で一人静かに口ずさんでいたのが新聖歌511番です。わたしの生も死もー、「Hallelujah」・「主にありて、やすし」と何度も、何度も讚美を繰り替えして来ました。

(2) ところで、ネヘミヤ記8章10節の御言には時代的背景があります。

バビロン帝国に捕囚とされていた神の民イスラエルが、ある時、突然、ペルシャ王クロスの特赦を受けて、母国イス

ラエルに帰ることが許されました。帰国した彼らが、最初に手掛けたことは、ネヘミヤの指導の下に、崩れかけていた神殿の城壁を補修する作業でした。

その工事が終わると、今度は、学者エズラがエルサレムの住民を一カ所に集め、木の台に登り、聖書を読みはじめたのです。しかもそれが、「あけぼの」から「正午」まで及んだというのです。エズラ一人で読んだではありません。12人の者たちが入れ替わり立ち替わり、モーセ五書を延々と読み続けたというのです。読み終わると、全ての民は、「アーメン」「アーメン」と手を挙げ、こうべを垂れ、地にひれ伏したのです。

これはおそろくですが、例えば、モーセ5書を読み進めるうち、出エジプト2章23節以下にさしかかったとします。そこには「イスラエルの人々は、その苦役の務めのゆえにうめき、また叫んだが、その苦役のゆえの叫びは神に届いた。神は彼らのうめきを聞き、神はアブラハム、イサク、ヤコブとの契約を覚え、神はイスラエルの人々を顧み、神は彼らにみこころを留められた」とあります。

彼らはその箇所を読み進められている時、気づいたかもしれませぬ、そこには、彼らが、天に向かって「うめき・「さけび」」の声を上げたので、それで主なる神が顧み、彼らをみこころに留められた。それゆえ救い出されたのです。

時に、何故、わたしとてきものものが、神の救いに与ったのか、と不思議に思うことがあるかもしれませぬ。いまさら、

こうした胡乱(うろん)な、迂闊(うかつ)な、ことを口にしたり、考えたりすることだけでもおかしなことなのです。

わたしが、導かれて、救いに与った時の動機も、きっかけも、すべては、わたしが、天に届くほど「うめき」・「さけび」の声を上げたからではないでしょうか、その「うめき」・「さけび」を主なる神が聴き留めて下さった、全てはここにあります。それを忘れたイスラエルは「歌を忘れたカナリヤ」ではないでしょうか。「うしろの山にすてますか、柳のむちで、ぶちますか」と歌われています。

救出の原点を忘れた「北イスラエル・10部族」は、アッシリアの捕囚民となり、「南ユダ・二部族」は、バビロニアに捕囚されました。こうまでバラバラとなったイスラエルの民ですが、それでもなお捨てることなく、主は、彼らを憐み、バビロンから解放し、ついに母国エルサレムに連れ戻して下さったのです。帰国した日の「第七の月の一日」に、ラッパを吹き鳴らして、男も女も一つとなり、エルサレムに集まって、「イスラエルの復興」を誓い合いました。

顧みれば、シナイの荒野の「アチ」に黒々とした汚点を残してきました。約束の地においても依然不従順の民でした。計り知れない恵みの数々をいただきながら、なおも、主に、許しと愛とを逆手に取って反逆していたことが次第に思い出されたことであろう。

こうして、エズラの指導により、御言が読み進められていくうち、自分たちのそ

れまでの不信仰な姿があらわになり、次第に自らの弁明や弁解は消えて失せはじめ、今や、主の命にいたる悔い改めに導かれることになりました。「悔い改める」とは、もう二度といたしません。自分の罪・咎を自覚したものは、主がわれみの主であることを覚えながら、自分の罪を嘆き・憎むまでにならねばなりません。そうした思いをいだいて、まことの神へと立ち帰り、新たな服従に心を向けねばなりません。

御言が読まれていくうちに、「うなじの硬い民」・「石製の民」であったことに気づき、ついに彼らばかり居て泣いたのです。

「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない救いを得させる悔い改めに導かれない。この世の悲しみは死をきたらせぬ。見よ、神のみこころに添ったその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起こさせたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意、それから処罰に至らせたことか」(②)「こころよ、この時の様子と思わぬままよ」。

聖書を読み終わると、「民はみな、手を上げながら、『アーメン、アーメン』と答えながら、心は喜び、地にひれ伏して主を礼拝した」。その時です、彼らに語られた御言——、それがネヘミヤ記8章10節です。「この日はあなたがたの神、主の聖なる日です。嘆いたり、泣いたりしてはならぬ。主を喜ぶことは、あなたがたの力であるから」。

重ね重ねてネヘミヤは、なおも彼らに言いました。「行って、上等の肉を食へ、甘いブドウ酒を飲みなさい。何も用意できなかった者には、こちらを贈ってやりなさい」。「悔い改めた」後は、「喰いあらためよ」とでもいうのでしょいか。キリストにあると信じていえば、「主を喜ぶ」・「讚美」にあります。考えてもみて下さい。世の人がうなだれて、下を向くばかりの時にも、主を讚美してきたのです。

「わたしたちは、キリストを通して、讚美のいけにえ、すなわち、御名をたたえるくちびるの果実を神に絶えず捧げようではありませんか」(ヘブル13:15)——「主を喜ぶ」ことは、神にささげられた「いけにえ」「犠牲の供え物」とみなされています。

宗教改革者の「M・ルター」は、それまでの過まてゐる(あやまてゐる)聖書解釈を正ただけではありません。讚美が日常生活に深く浸透する努力を払いました。そのため、カトリック教会から、ルターは、讚美歌によって、多くの信者を誘惑したとの陰口をたたかれていました。中世においては、讚美と言えば、僧侶が歌うグレゴリオ・チャント全盛時代でしたが、礼拝者はただ、それを聞くだけでした。

讚美歌の中には、ルターの残した讚美歌が十数曲あります。「かみはわがやぐら」「さしひく家のにも」「天よのくたりて」「主、死にたまえの」「この世を

つくつくし御霊は「なごり」7曲が旧讃美歌では採用されております。

画家の「グスタフ・アドル・シユパンチンゲン」に「ゆるる」家族に囲まれたルター」の絵があります。そこには愛妻の「ケーテ夫人」と、5人の子供達に囲まれて、その真ん中にいるルターがリユートという古楽器を響かせながら、子供達と楽しく歌っている光景がえがかれています。わたしたちもまた、家庭においても、個人としても、もっと、もっと、讃美を大切にしたいと思います。

わたし個人のことをいえば、明日説教となると、急に霊的貧しさを覚え始めて、一人牧師室で声を張り上げて、讃美歌一番から歌い始めて、ついには、3000番、いえ、4000番にいたることもしばしばでした。

病めるときも、順境にも、逆境にも、愛するものが召された時も、葬儀において、墓の前にただずむ時までもつとつと、常に、「ただえの歌」「讃美」を絶やしませんでした。

神戸の神学校では、二階の山田先輩の部屋から、夕暮れ時になると讃美歌が聞こえてきました。誰に聞かせなくてもまなへ、静かに、ゆつくと歌う讃美でしたが、歌う調子から、調子の良さと悪さと悪いきとわかるようになりました。讃美ときがわかるようになりました。讃美になさいます言われて、讃美できない時があります。しかし、その時も、「だめに讃美してみる」「とびつきます。」「いっつか喜びが湧上がることを、たびたび経験してきました。

「マーリン・キャロザース」というアメリカの牧師が書いた「讃美の力」には、「わたしの願っている将来のために神を讃美するのではありません。現在のあなたがまます讃美するのです。良き結果を望みながら讃美しているうちは、ただ、自分をあざむいているに過ぎません。」とは、少々、きついなと思います。それでも「アーメン」としなくてはなりません。「ありのまま」の現状を、神の御心として、受け入れること、そこに、讃美の基盤があります。これが讃美の鉄則ではないでしょうか。

「あなたがたは、主にあつていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩ってはならない。ただ、事に、感謝をもつて祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではなつてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあつて守るであらう」(ピリピ4:4-7)。

【祈ります】

父なる神さま、新たな年を迎えました。今年一年、いつも、感謝をもって祈と願いとをささげ、主を喜ぶものとなるるよう導いて下さい。主イエス・キリストの名により祈ります。「アーメン」